

# 渡り鳥

東谷 薫

季節によって住む所を変える鳥を「渡り鳥」という事は誰でも知っているが、私の事を「渡り鳥だ。」という人が相当多い。それは私が、北の果の樺太から、南の端の台灣まで渡り歩いて来たからである。

樺太に渡ったのは、鳥のように季節によったのではないが、昭和6年で、12月2日に大泊港に上陸し、豊原第二小学校に音楽教育と体育ダンス、音楽遊戯、を看板に赴任した。

先づ喜ばせてくれたのは、樺太の雪だった。下手糞ながら、スキーを履いての滑走、まるで天国の舞のようである。歌って、踊って、滑って、夜は麻雀、面白くて、愉快で、楽しくて、まるで夢のような毎日であった。

新学期になった。4月5日になると渡り鳥が帰り始めた。夏鳥が渡りかけた。豊原には67人のハンターがいた。そして代る代る理科の先生の所へ色々な鳥を持って来る。理科の先生は名前は調べるらしいが、あとはどうするのか行方不明である。

「この間の鳥は、何んといふ鳥」。「……鳥だった」。「どうしました」。「くさってしまった」。「これは勿体無い、標本にして置けばよいのに」。と思ったのが、剥製に志さず糸口であった。歌ったり、踊ったり、できるのは若い内さけで、年とってからは出来ることではない。剥製ならば年をとってもいくらでも出来る。と思ったが、さてどうして作るのか、見当もつかない。折りも折り、理科学術研究会主催で剥製講習会が開催された。参加者150人、それは一生懸命だった。そして閉会式の時、講師小松先生は、

「こうした技術は一度や二度の講習を受けたからとて身につくものではない。それは練習である。それも30程続けてやり順序を暗記で出来るまで努力することが上達の近道である。」と訓辭された。根性のよい私は、真に受けて、それから毎日毎日鳥を探して歩いた。ハンターの家を片端から尋ねて鳥をわけてもらった。ある時は、ゴミ箱に捨ててあった死んだ猫の仔を、又犬の仔を持って帰って家内に叱られた事も殆ど毎日であった。それもそのはず、剥製は全部家で夜の仕事だったからである。5~6時間かかり1つ終って、1風呂浴びて寝るのがたいてい1時頃になる。

所が、「東谷が剥製をする。」という噂が町に流れ出して、「飾物にするから。」「贈り物にするから。」と頼まれが来るようになった。8月には樺太庁立博物館から、「これは貴重なので

入念にやってほしい。」と小さな小鳥が2羽届けられた。仰せの通り入念にやった。吾ながら満足な出来映だった。所がこれが私の技術のテストだった。見事合格数日の後博物館の動物部の剥製の受持の嘱託となった。博物館の標本採集は年中で（樺太の獵期は9月1日から翌年5月31日まで）剥製材料も数多く来ることになった。

そうしたある日中央試験場から150kgもあるトナカイの牡の剥製をせよとの事である。校長も「授業の方は補欠をしてやる何日かあってもよい引受けよ。」との事、小使2人を助手に、それこそ臍の緒を切って初めての大物である。だがどうにか出来上ると相当なお褒めを頂いた。剥製の数も3,500近くになったと思う。恩師小松先生も我が事のように喜んで下され、「もうお前は立派な1人前になった。この上南方へでも行って爬虫類でも研究してくると鬼に金棒という所だ。」とおっしゃった。根性のよい私は助べ根性を出して、台湾へ飛ぶ事を考えた。

昭和16年4月1日台湾新竹州新竹国民学校へ、これも音楽教育、体育ダンス、音楽遊戯、鳥獣研究を看板にして赴任し、7月には新竹中学校教務（生物と音楽）嘱託として採用された。台湾ではスキーは出来ないが釣の天国である。池や川では、コイ、フナ、ウナギ、海では、キス、クロダイ、面白い程釣れる。樺太の寒帯生活もさることながら、台湾の熱帯生活も亦良さがあり面白味もある。特に日本人の威張れた生活であった。所が12月8日、大東亜戦争に突入し、毎日軍艦マーチ入のニュースであった。やがては世界を征服するかと思ったが、17年4月12日本土第2回目の空襲は新竹で海軍飛行場は相当甚大な被害を受けた。それをきっかけに連日連夜警戒警報や空襲警報が鳴った。爬虫類の研究どころではなく防空壕暮しだった。そして20年8月15日終戦21年4月11日広島県大竹港に引揚げ家族全員無事、リツクサツク1つづ背負い帰って来た。でもこの5年に熱帯の鳥獣と爬虫類など約500点程の標本を作り、新竹に残しては来たが私としては相当の収穫があった。

成和中学校に赴任、26年の2月当時光陽中学校長、堀芳孝氏（初代博物館長）から足羽山に博物館を作る予定だが動物部特に剥製の方を受持つて呉れぬかとの交渉を受けた。樺太と台湾に約4千点の作品を残して来たが、全部外国の所有となっている。今度は我が郷土に残るのだと思い快く引受けた。そうして福井県下を廻って27年の4月の開館までに約200点を作り予定のケースをやっと埋めた。それから14年、講習会を開くこと約50数回、受講者約1,500人位になるかと思う。中には相当の腕前を持ち活躍している人もある。

作品も、樺太、台湾を合わせると5,000点を越すかと思ふが、その中には220kg程のトラを初め、ライオン、シカ、クマ、トナカイなどの大物から、日本最小の、キクイダダキまで手にかけて来た。又鳥獣だけでなく爬虫類は勿論、魚類、甲殻類、両棲類などの作品も相当ある。

---

北は樺太から南は台湾の端まで渡り鳥のように渡り歩いて來たので、これからは静かに余生を  
と思っているが、獵期ともなれば仲々忙しくなる。今年は珍しく、体長175cm、体重140～  
150kgのオサガメ、をる頭も剥製にした。又、キジ、ヤマドリ、カモ、などは数10羽にもな  
ろう。又最近、90kg程の、クマ、も1頭作ったが、これで秋の獵期までは休ませてもらえるで  
あろう。

渡り鳥 いつの日に 古巣に帰ることやら。